

2000年11月27日 定例社長会見 <要旨>

質問：いよいよスタートしますBSデジタル放送なんですが、期待と見通しは？

氏家社長：

これは、反響だけはそれなりにいいはずという感じで、これをどうやって我々の側で受け止めて、結びつけるかというところが、ちょっと遅れているかなという気がしないでも無いんですよ。

メーカーの方でも、若干BSに対する期待に環境整備の方が乗り切れてないのかなという、それが恐いんでね。始まったら、さらにそれを徹底していくということです。これは、認知していただくしかしょうがないですから、各社やると思いますけど、私どもも徹底した認知を考えています。

質問：データ放送も始められるわけですが、バグが出るんじゃないとかいろいろな噂が出てますけど、その辺の対応はどうなってますか？

BS日テレ漆戸社長：

今出ている受信機に関してはほとんど問題が無くなっています。

私どものほうでも本格的なデータの試験をやってますけど、ちゃんと作動しています。私どもの番組で「キングオブクイズ」というのに対応するのを、先週テストしたんですが、非常に上手くいっています。

記者：BS事業の単年の黒字化と累損の解消の見通を。

漆戸社長：

その辺は大変難しい問題ですね、今、氏家社長から手ごたえを感じてるというお話があったんですけど、その通りだと思います。私どもが当初、千日1000万台というのが、単なるスローガンだというふうに思ってる部分もありましたけど、ここへ来て実際に作業をすすめて行く中で、特に広告主関係からの強い手ごたえを感じております。

ただ、その通りに今後もすすんで行くとは言えない訳ですから、あくまでも見通しということで申し上げますと、そのまま順調に推移をしていった場合には、受信機の普及が広告主のご要望にもお応えできるということが進んでいく訳ですから、そうしますと、広告の出稿も多くなるということを前提にして考えますと、

4年後ぐらいには単年度黒字ということも考えられるのではないかなどという、非常に楽観的な考え方、なりつつあるという状況です。累損がどうなるかということになりますと、一概にはいえませんが、BS日本としては、経営の効率化を計っていきたいと考えていますから、当初は10年というふうに考えていたんですが、もう少し早めに累損の解消もあり得るんじゃないかなと思います。7年で累損解消となればいいな、という今のところ手ごたえです。

質問：日本テレビの業績はBSが始まることによって、どのような影響が？

氏家社長：

はっきり申し上げまして、私の見通しは地上波は今がピークだと思います。今後は落ちる一方だと思います。それはBSあり、110°CSあり、随分広告市場が地上波から（そちらへ）流れて行くということからです。今後の日本経済の伸びにもありますけれど。

質問：マスメディアに対する規制について

氏家社長：

これはメディアに対する20世紀最大の問題提起が行われたというような、歴史的認識を持っているんですよ。今は、言論の自由を抑圧してもっていう考え方が強くなっているだけに、テレビ番組は自らの自浄努力で、内容を向上させていくべきであって、法的に規制することは、そこから派生して言論の自由全体に影響を及ぼす可能性があるというのが全体的な感想です。

質問：番組視聴率関連、年末年始番組についてお願いします。

萩原専務：

前面的な年末編成を組むのは12月25日からの週と1月1日からの週、この2週間が全面特番編成という形になります。

31日のいわゆるカウントダウンですが、今年も昨年同様「電波・雷波少年」のス

ペシャルがよる9時から入ります。この“<sup>らいでん</sup>雷電SP”の中で20世紀と21世紀をまたぐということになります。その他の特番はだいたい恒例のものを組んであります。1月1日は「ものまねバトル」、「仮装大賞」は1月3日、「初めてのおつかい」も同じく1月3日。あと、クリスマスに関しましては、12月23日が恒例の「さんま&スマップ」、その他12月26日に「伊東家の食卓SP」、こういった強いレギュラー番組と、恒例の単発で対応します。  
さらに、2000年の年間の視聴率ですが、これは7年連続の年間4冠王というのが100%確定と言えると思います。

質問：ワールドカップのこれからの展望について。

漆戸社長：

試合数に関してはJCとしてNHKと民放で、これはまだ詳細が決まっているわけでは無いですが、権利金の分担比率によって、6:4、NHK6民放4という形で分けてやろうじゃないか、ということは大方の合意を得ています。一番関心のある日本戦の予選3試合についても、民放2でNHKが1、その代わり決勝戦をNHKがやる。カードの配分は当然考慮されますけど。とくに必須とされている試合、日本戦3戦と、準決勝、開幕戦 このへんは、どうやって分けていくか今後決めていきたい。それからもちろん、2001年の12月にドラフトがありますから、それで各国の組み合わせが決まってきます。それを見た上で今度、64試合からどの40試合を選ぶかというのを決めて、その中でまたそれを24と16に分けてという、こういう作業が来年の12月にあると。NHKはそれで終わるんですが、民放はそうはいきませんで、16試合をどういうふうに民放の中で分担していくか、これが難問中の難問で。どういう風にやるか民法連の中でまだ合意を見てませんし、またこれから考えてやっていきたいなと思っております。

質問：年末から来年にかけての景気動向と営業見通しについてお願ひします。

氏家社長：

先程申し上げた通り、地上波放送は、今がピークです。BSとの競争、CSとの

競争などもありますから、これはもう内部のシェアの争いと、景気の動向。来年からまた下降傾向に入る可能性が高いと思ってますからね、そういう意味でね、長期的にはマイナス。また、テレビ各局は、肌寒い時代に入るだろう。そういうふうに思ってますけどね。

質問：今年最後の会見ということで、今年の回顧と来年の展望を。

氏家社長：

今年は決算的に言えば、当初予想したよりプラスだったような気がします。ただ、その一方にはテレビのコンテンツに対する社会的批判や、注目度がこれ以上集まった年も少ないと思います。したがって、新世紀、来年度は経営面では肌寒い時代に入って行くと思いますが、社会的批判から起こってくる、言論の自由への抑圧をどう対処していくかということが、最大の問題点だと思います。

以上